

**英語授業指導と ICT 教育に関する一考察：
教職課程履修生の ICT 英語授業経験と ICT 教育への意識を探る**

吉住香織（神田外語大学）

1 はじめに

教育現場での ICT 活用が加速化している。次期学習指導要領が目指す、主体的・協働的な学びを実現する上で、また確かな学力の育成に向けて、学びの質の向上をめざす ICT 教育への期待は大きい。現職教員のみならず、大学の教員養成課程段階でも ICT 活用教育に対応できる授業指導力がいま求められている（ICT を活用した教育の推進に関する懇談会、2014）。

筆者が教職課程を担当する英語教育について言えば、今年 2017 年 3 月に公表された中・高等学校教員養成・研修の英語のコア・カリキュラムの中では、英語力・指導力強化のために大学の教職課程に期待される具体的な内容が提示され、すでに ICT の英語授業指導への活用は、生徒の資質・能力を高めるための重要な指導内容とされている。将来教員をめざす教職課程履修生にとって、ICT 活用指導力の向上は喫緊の重要課題と言える。次期学習指導要領が発表され、英語教育が大きく変わろうとしている今、英語教員養成課程での指導のあり方も又問われているのである。

しかし、ICT 活用力の向上が求められる一方で、教職課程履修生を対象とする ICT 活用に関する研究はほとんど行われておらず（小清水他、2012）、情報も限られている。英語科教育法履修生の ICT の指導力を育成するためには、まずは履修生の ICT 教育に関する現状を把握することが必要である。彼らはこれまでにどのような内容の ICT の活用を経験し、また英語の授業に ICT を活用することに対してどのような意識をもっているのか。本研究ではそれらを明らかにすることを目的としたい。

2 研究の目的

本研究の目的は以下 2 点について明らかにすることである。

- (1) 英語科教職課程の履修生が中学・高校で経験した英語授業での ICT 活用とはどのようなもので、その経験を彼らはどのように受け止めているか。
- (2) 英語科教職課程の履修生は、自分が今後 ICT を活用した英語授業指導を行うことにどのような意識をもっているか。

3 研究の方法

3.1 研究環境

本研究は、教職課程の授業として、2017 年 4 月から 2017 年 7 月までの期間、前期科目として開講された「英語科教育法 I」（半期・2 単位）の中で実施された。具体的には、英語教育における ICT 活用を考える授業の一環として

行われ、その研究結果はその後に実施された英語授業指導において、英語授業指導での ICT の有効な活用方法を考える授業内容に反映されることを意図したものである。

3.2 参加者

研究調査の対象となった参加者は、2017 年度前期に「英語科教育法 I」を受講していた 3 クラス、計 41 名の学生である。内訳は、3 年生 34 名、4 年生 5 名、科目等履修生 2 名で、大半は翌年高等学校での教育実習を予定していた。

3.3 調査方法

2017 年 7 月、筆者が担当する「英語科教育法 I」の各クラスで質問紙調査を行った。授業では最初にアンケート用紙を配布して実施者が主旨を説明した。次に 20 分間の回答時間を与え、その後回答用紙のみを提出してもらった。

内容としては、1) 履修生の ICT 教育という言葉に対する認知、2) 中学・高校の英語授業における履修生の ICT 活用経験、3) その経験に対する履修生の受け止め、4) 英語授業に自分が ICT を活用することに対する意識、5) 授業への ICT 活用の期待、6) 授業での ICT 活用の問題点、以上 6 つのテーマに関連するもので、対応する 10 の質問項目に対して選択式で回答するものであった。なお、履修生の意識や認識を問う質問テーマ 3) と 4) については、意識の度合いが数量的に分かるように 5 件法での回答を求めた。さらに選択式の質問紙調査の最後に、英語教育に ICT を活用するために履修生自身が今後知りたい、あるいは身に付けたいこと、または不安や心配を感じていることについて任意で自由に回答する記述欄を設けた。本稿ではこれ以降、以上 6 つのテーマに関連した全 10 項目の質問 1 から質問 10 に対する選択式の回答結果をデータ 1、履修生が任意で回答する 3 つの質問 11 から質問 13 に対する記述回答の結果をデータ 2 と呼ぶ。

3.4 データ分析の方法

回答に不備のあった 2 名を除く履修生 41 名のデータ（有効回答率 95%）を分析対象とした。分析は量的質的な混合研究法を採用している。数量的データであるデータ 1 については集計結果を示した。またデータ 2 については、まず質問中のキーワードに対して記述から浮かび上がってくるテーマを探し、次に各テーマ別に、文章テキストに含まれる似通ったテーマを見つけ出すコーディングの方法を用いて、記述を分類しながらサブテーマを探し、共通すると思われる項目毎に分析した。

4 研究結果

データ 1、データ 2 の順序で、結果について報告する。

4.1 データ 1 について

まず履修生自身の ICT を活用した英語授業経験を明らかにするためのテーマと、英語教育における ICT 活用に対する意識を明らかにするためのテーマをそれぞれ 3 つずつ設定し、それぞれのテーマに対応する 10 の質問項目を用意した。データ 1 は、質問 1 から質問 10 まで、合計 10 の質問に対する選択式の回答結果である。質問 1 以外は集計結果をそれぞれ一覧表にした。なお、テーマの後のカッコ内は対応する質問の番号で、質問項目の内容は下線で示した。

4.1.1 履修生の ICT 教育という言葉に対する認知度

「ICT 教育」という言葉に対する認知度を把握する質問 1「あなたは今回授業で紹介される以前に、「ICT 教育」という言葉を聞いたことがありましたか」、に対する回答結果である。「ある」と回答した履修生は 21 名で、「ない」と回答した 20 名を僅かに上回り、回答者全体の 51%であった。

4.1.2 中学・高校での英語授業における ICT 活用の経験

1) 英語授業で経験した ICT 機器

表 1 に「中学・高校、それぞれの英語授業で、履修生がどのような ICT 機器を使ったことがあるか」、を尋ねた質問 2 と 4 に対する回答の結果を示した。複数回答可とした。その他を含む 15 の機器の選択枝の中で、最も多くの履修生が経験したことがあったのはデジタル教材で、中学が 56%、高校が 53%で、いずれも過半数を超えている。パソコンとプロジェクターは、それぞれ中学 19%、高校 21%で、中高共に 2 番目に多く挙げられていた ICT 機器であった。中学では高校よりデジタルテレビの利用が高く（中学 19%、高校 12%）、

表 1 中学・高校の英語授業で経験した ICT 機器と経験した履修生の比率

*n = 41

質問	中学／高校の英語授業ではどのような ICT 機器や教材を活用していましたか。以下の中から選んで下さい。 *複数回答可（質問 2 と 4）	中学		高校	
		回答	%	回答	%
ア	パソコン（パソコン教室の利用含む）	8	19%	9	21%
イ	CALL 教室	2	4%	2	4%
ウ	電子黒板	0	0%	3	7%
エ	デジタルテレビ	8	19%	5	12%
オ	プロジェクター	8	19%	9	21%
カ	実物投影機や書画カメラ	2	4%	1	2%
キ	タブレット端末やスマートフォン	0	0%	0	0%
ク	テレビ電話	0	0%	1	2%
ケ	IC レコーダー	3	7%	1	2%
コ	デジタルカメラ	1	2%	2	4%
サ	デジタル教科書	0	0%	0	0%
シ	デジタル教材（DVD・CD-ROM 含む）	23	56%	22	53%
ス	インターネット	2	4%	5	12%
セ	ICT 機器は全く使わなかった	1	2%	7	17%
ソ	その他	19	46%	14	34%

表 2 中学・高校の英語授業で経験した ICT 利用言語活動の内容、経験した履修生の比率

*n = 41

質問	中学／高校の英語授業では、ICT 機器を利用したどのような活動を経験したことがありますか。以下の中から選んでください。*複数回答可（質問 3, 5）	中学		高校	
		人数	比率	人数	比率
ア	DVD など録画映像の視聴	14	34%	8	19%
イ	英語番組視聴（ニュース、英語番組他）	1	2%	3	7%
ウ	ビジュアル・エイズの提示した授業	12	29%	8	19%
エ	授業での説明の際に利用	10	24%	10	24%
オ	フラッシュカードを映像で提示	3	7%	2	4%
カ	チャットなど対話を中心とする活動	3	7%	5	12%
キ	リスニングを中心とする活動	3	7%	9	21%
ク	リサーチ、情報収集学習	2	4%	4	9%
ケ	メールの授受	1	2%	3	7%
コ	プロジェクトや発表活動	2	4%	2	4%
サ	オンライン英会話	1	2%	1	2%
シ	発音練習	21	51%	23	56%
ス	英語力向上のためのプログラム利用	2	4%	4	9%
セ	すべて一度も経験しなかった	5	12%	7	17%
ソ	その他	1	2%	3	7%

2 番目に挙げられていた。一方で、中学より高校での使用が多いのがインターネットで、中学 2%に対し高校では 12%でやや開きがあった。また数は少ないが、IC レコーダーの利用は中学の方が多く（中学 7%、高校 2%）、電子黒板の利用経験があるのは、高校の場合のみであった（中学 0%、高校 7%）。一方、タブレット端末やテレビ電話、デジタル教科書については、中高問わず使用経験のある回答者はいなかった。さらに、ICT 機器は全く使わなかったとした回答者は、中学では 2% だが高校では 17%で、ICT の未経験者は高校でより増えていることが分かる。最後のその他の欄への記入がかなり多いが（中学 46%、高校 34%）、回答者が具体的に記述回答していた機器は全て CD デッキであった。

2) 英語授業で経験した ICT 機器を活用した活動

表 2 は、「中学・高校それぞれの英語授業で、履修生が ICT 機器を使って具体的にどのような活動を行ったか」を尋ねた質問 3 と質問 5 に対する回答の結果を示している。やはり複数回答可とした。中高共に最も多かった活動は発音練習で、中学が 51%、高校が 56%であった。また中学、高校における授業での説明時の ICT 利用は共に高く、24%であった。但し 2 番目以降については、中高間での ICT 経験の内容はかなり異なる。DVD 視聴（中学 34%、高校 19%）やビジュアル・エイズ利用の授業（中学 29%、高校 19%）では中学での経験者が多いが、リスニングを中心とする活動（中学 7%、高校 21%）は高校での経験が上回っている。人数自体は少ないが、リサーチ・情報収集（中学 4%、高校 9%）やメールの授受（中学 2%、高校 7%）などについては高校での経験の方が多かった。

表 3 中学・高校の英語授業での ICT 活用経験に対する履修生の受け止め

*n = 41

質問	あなたは中学／高校でどの程度まで ICT 機器を活用した英語の授業を経験した、と受け止めていますか。(質問 4, 7)	中学		高校		全体
		数	%	数	%	
ア	大いに経験した	1	2%	4	9%	6%
イ	ある程度経験した	2	4%	2	4%	4%
ウ	どちらとも言えない	4	9%	5	12%	10%
エ	余り経験していない	25	60%	18	43%	52%
オ	全く経験していない	9	21%	12	29%	25%
	Mean	2.04		2.21		2.13

表 4 英語授業に今後 ICT を活用することに対する履修生の意識

*n = 41

質問	ICT 教育を英語の授業や指導に ICT を活用していくことについて、あなたは今どのように考えていますか。(質問 8)	数	%
ア	大いに取り入れたい	12	29%
イ	ある程度取り入れたい	25	60%
ウ	どちらとも言えない	2	4%
エ	あまり取り入れたくない	2	4%
オ	全く取り入れたくない	0	0%
	Mean	4.14	

表 5 ICT を活用した英語授業指導の利点についての履修生の意識と比率

*n = 41

質問	ICT 機器を英語授業指導に活用することの良い点はどのようなことだと思いますか。以下から 4 つ以内で選んで下さい。(質問 9)	人数	比率
ア	授業が分かり易くなる	28	68%
イ	個別の指導ができる	2	4%
ウ	授業を効率良く行える	28	68%
エ	英語を楽しく学べる	32	78%
オ	双方向授業が可能	6	14%
カ	デジタル機器の使用技術の向上	12	29%
キ	動機づけ	21	51%
ク	特になし	0	0%
ケ	その他	1	2%

4.1.3 中学・高校の ICT 活用英語授業経験に対する履修生の受け止め

表 3 は、「中学・高校それぞれの ICT 活用英語授業経験を履修生がどのように受け止めているか」、という質問に対して、ア「大いに経験した」、イ「ある程度経験した」、ウ「どちらとも言えない」エ「余り経験していない」、オ「全く経験していない」からそれぞれ 1 つずつ回答を選ぶ 5 件法の回答結果を示す。平均値は中学が 2.04、高校が 2.21、全体では 2.13 で、高校での経験の方が若干高いものの、数値はかなり低い。またそれぞれについて「全く経験し

ていない」と受け止めている回答者は、中学で9名（21%）、高校が12名（29%）であった。さらに ICT 活用の授業を中学・高校両方共、全く経験していない、とした履修生の数は全体の約5分の1に当たる8名に上った。

4.1.4 英語授業への ICT 活用に対する履修生の意識

表4は、質問8「今後英語授業指導に ICT を活用していくことに対してどのような意識をもっていますか」、に対する回答の集計結果である。履修生は、ア「大いに取り入れたい」、イ「ある程度取り入れたい」、ウ「どちらとも言えない」、エ「あまり取り入れたくない」、オ「全く取り入れたくない」の中から1つを選択する5件法の回答方式である。平均値は4.14で、ア「大いに取り入れたい」を選んだ回答者とイの「ある程度取り入れたい」を選んだ回答者の人数を合計すると37名で、全体の89%に当たる履修生が英語授業指導への ICT 活用を前向きに捉えていることを示した。しかも、質問7で述べた ICT 活用の授業を中学・高校両方で「全く経験していない」と回答した8名の中で、質問8に対して「大いに取り入れたい」と回答した学生が5名、「ある程度取り入れたい」が2名であった。それに対して、「あまり取り入れたくない」と回答した学生は僅かに1名であった。

4.1.5 英語授業での ICT 活用の利点

表5に、英語授業指導への ICT 機器活用の利点を尋ねた質問9「英語授業指導に ICT を活用することの良い点はどのようなことだと思いますか」、に対する回答結果を示す。回答者はその他を含む9つの選択肢から4つを上限として選んで回答した。最も多かったのは「英語を楽しく学べる」で、32名（78%）の履修生が利点として挙げている。次いで「授業を効率良く行える」、「授業が分かり易くなる」で、いずれも28名（68%）の履修生が選んでいた。さらに「動機づけ」がこれに続き、過半数を超える21名（51%）の履修生が選んだ。一方で、「個別の指導ができる」はかなり少なく、また「双方向授業が可能」を選択した回答者は全体の1割強の6名（14%）と少なかった。なお「その他」への記述者1名は、「生徒の記憶に残りやすい」ことを挙げていた。

4.1.6 授業への ICT 活用の問題点

表6に、英語授業指導への ICT 機器活用の問題点等を尋ねた質問10「ICT 機器を英語授業指導に利用する上での課題や問題点はどのようなことだと思いますか」、に対する回答の結果を示した。利点を尋ねた直前の質問9と同様に、回答は「その他」を含む9つの選択肢から4つを上限として選択する形式であった。最も多かったのは「機器や施設他、学校・地域差がある」で回答者全体の9割に当たる37名が問題点として挙げていた。次に多かったのが「教師の ICT 技術のレベルに左右される」で32名（68%）、さらに「準備に手間がかかる」が19名（46%）で3番目に続いた。「どう活用すればよいか分からない」を、回答者全体の4分の1を越える11名が選択していた。なお、その他の欄に回答した1名の記述内容は、「先生が機械操作に気を取られ授業に集中できない可能性がある」であった。

表 6 ICT を活用した英語授業指導の課題や問題点についての履修生の意識と比率

*n = 41

質問	ICT 機器を教育を英語授業指導に活用することの課題や問題点はどのようなことだと思いますか。以下からで選んで下さい。※4 つ以内 (質問 10)	人数	比率
ア	どう活用すればよいか分からない	11	26%
イ	生徒の個人差が出やすい	8	19%
ウ	機器や施設他、学校・地域差がある	37	90%
エ	授業準備に手間がかかる	19	46%
オ	生徒との対面コミュニケーションが減る	12	29%
カ	教師の ICT 技術のレベルに左右される	32	68%
キ	デジタル機器を長時間使用の眼や身体、精神面への影響	12	29%
ク	特になし	0	0%
ケ	その他	1	2%

4.2 データ 2 について

データ 2 は、任意での回答を求めた質問 11、質問 12 に対する記述回答の結果である。履修生は、英語教育に ICT を活用するために 履修生自身が今後知りたいこと（質問 11）と、不安を感じていること（質問 12）について、記述を希望する者のみが自由に回答した。任意ではあったが、質問 11 に 35 名（85%）、質問 12 に 32 名（78%）の回答があった。

回答はその内容に応じて以下の通り分析・分類し、テーマ別に結果を示した。まず、データ 2 の記述内容に応じて、キーワードに注目しながらそれぞれの文章テキストに含まれる似通ったテーマを見つけ、次に記述内容をテーマ別に分類した。結果を質問の順に、テーマ別に報告する。同様の内容で複数の回答があった場合、繰り返しを避けるために典型的な記述回答を代表例として掲載してある。その場合、文末のカッコ内に複数回答あったことを明記した。なお、回答者の特定を避けるため、大きく意味が変わらない限り、分析者の責任において回答の文言の一部を省略し短くまとめた。また統一感を図るために、敬体で記されている記述は全て常体に変更してある。

4.2.1 ICT 活用の為に履修生が今後身に付けたいこと、知りたいこと

質問 11：ICT を英語教育への ICT 活用で、今後知りたいこと、身に付けたいことがもしあれば記述して下さい。

質問 11 に対する記述回答の内容について、結果を報告する。知りたいこと、身に付けたいこととして挙げられていた記述を共通要素で分析し、浮かび上がってきたキーワードに応じて、1) 授業での ICT 活用の方法や指導法、2) ICT 授業の実践例、3) ICT 機器関連の情報や使用技術、4) 教師自身の研修、5) その他、の 5 つのテーマに分類した。以下典型的な記述例と共に、テーマ毎に結果を報告する。

1) 授業での具体的な ICT 活用の方法や指導法

最も多かったのは、ICT を実際に授業のどのような場面で、どのように活用すればいいか、ICT を活用した効果的な指導法を知りたい、あるいは身に付けたい、とする記述であった(17 名, 41%)。さらに、生徒にとっての ICT 活用の効果を視野に入れた記述内容もあった。典型的な記述例を以下に挙げる。

- ・ どの英語授業でどう活用していけば良いか (複数)
- ・ 授業のどの段階、どんな場面でどのような ICT を使用するのが適当か (複数)
- ・ ICT を使った授業の雰囲気や組み立てなど新しく身に付ける必要があることを知りたい (複数)
- ・ どの skill に有効か、例えば Listening に有効か、生徒をうまく指導する方法を知りたい
- ・ 現職の先生がどのようにしてパワーポイントや ICT を活用しているのか、どのような場面で使用しているのか知りたい
- ・ 大学での授業で興味をもったのでぜひ取り入れたい。具体的なやり方を知りたい
- ・ ICT の生徒に効果的な活用法を知りたい (複数)

2) ICT を活用した授業の実践例

具体的な実践例を知りたいという記述も目立った (8 名)。代表的な記述回答例は以下の通りであった。

- ・ 活用例を知りたい (複数)
- ・ 授業のどのタイミングでどのように取り入れるべきか授業例を知りたい。
- ・ 実際にどのような ICT 教育を行っていてどんな効果があるか、知りたい
- ・ どんな使い方が主流なのか。英語を暗記科目でなく ICT を利用してイメージや図等で覚えて貰いたい

3) ICT 技術、および機器使用に関する知識や情報

ICT 機器を使いこなす技術とともに、主に関連する知識と情報に関する記述であった(8 名)。

- ・ 機械操作技術など使い方を知りたい (複数)
- ・ 機器を使いこなす技術を知りたい (複数)
- ・ どのような機器があるのか、ICT 活用のための基礎的な知識を身に付けたい
- ・ 自分の機械に対する技術力
- ・ 各 ICT の特徴を知り、何のアクティビティーにどの ICT が効果的か
- ・ 中高で ICT 授業経験が無いので基礎的な知識から学びたい

4) 教師としての研修と努力

それぞれ1名ずつではあったが教師をめざす自分自身が取り組むべき課題として記述した回答者がいた。

- ・ ICT の技術向上は自分で努力できるので、実際にビジュアル教材での授業を試してみたい
- ・ 技術や流行の移り変わりに敏感に反応しそれについて行けるようにしたい

5) その他

それぞれ回答者は1名ずつだったが、回答記述を紹介する。

- ・ ICT では伝わらない対面講義のよさを知りたい
- ・ ICT 活用する際の注意点を知りたい
- ・ 授業準備の進め方を知っておく

4.2.2 履修生自身が、不安を感じていること

質問 12：英語教育に ICT 活用を取り入れる上で、心配や不安に思っていることがあれば記述して下さい。

質問 12 に対する記述回答内容を共通要素で分類した結果を、質問 11 同様、テーマ別に、かつ典型的な記述内容例を示しながら報告したい。記述内容を読んで、不安や心配の対象として浮かび上がってきたテーマは、1) 知識・情報の不足、2) 自分の ICT 技術、3) ICT 授業未経験、4) ICT 機器操作や使用、5) 教師側の準備の負担感、6) その他の 6 つに分類された。テーマに沿って代表的な回答例を示しながら、それぞれの結果を報告する。

1) ICT を活用授業に関する知識・情報の不足

実際に ICT を使用した授業場面についての経験や現場の情報が無いことに対する記述が多かった。(9 名)

- ・ どんな場面でどのような ICT を使用するのが適当か分からないから不安
- ・ うまい活用の仕方がイマイチ分からない
- ・ どの英語授業でどう活用していけば良いかわからない(複数)
- ・ 大学にあるようなコンピューター機器の環境が、実際に現場ではどの位進んでいるかが気になる

2) 自分の ICT 技術

授業で自分が実際に ICT を使いこなせるのか、主に自分の指導技術に対する不安や自信の無さを訴える内容が目立った。(9 名)

- ・ 自信がない(複数)
- ・ ICT が急速に発達していて自分が取り扱いについて行けるのか、不安

- ・自分がついて行けるか
- ・技術やトラブル:機械をうまく使えないことに苛立ってしまいそう

3) ICT 活用英語授業の未経験

直前の質問 11 に対する回答の時と同様に、中学、あるいは高校の時に ICT 活用の授業経験が無いことを挙げて心配をする記述が目立った(8 名)。

- ・経験がなく ICT をうまく使いこなせるか自信がない (複数)
- ・全くに近く ICT 経験が無いので活用例を知らない ICT 教育を想像するのが難しい
- ・経験無いので基礎的な知識が必要で慣れるのにも時間がかかり心配
- ・私立の大学と違って公立だからこんなにも経験がなかったのかもしれないが、心配

4) ICT 機器操作や使用

トラブルやその対応など、ICT 機器の使用に伴う不安やそれが授業に与える影響について記述していた (6 名)

- ・トラブルにどう対応するのが心配 (複数)
- ・うまく使えば効率化が図れるが機材トラブルや準備や進行に手間取ると生徒がだれてしまう危険性あり (実体験)
- ・ICT を取り入れるのは良いことだが、もし授業中にトラブルが起こったら修復に時間がかかったり用意したものが使えなくなったりするのではないかな
- ・機械がクラッシュを起こしたときの授業の立て直し方が分からない

5) 教師側の準備の負担感

便利な一方で、準備などに伴う教師の負担を記述した回答が中心であった。

- ・準備に手間がかかる (複数)
- ・事前に映像を視ておくなど、教師の準備の負担が大きい
- ・地域や学校によって設備が異なるので、異動すると計画を 1 から練り直す必要がある

6) その他

ICT の活用による弊害としての指摘がそれぞれ 1 つずつあった。また生徒の視点からの不安や問題を指摘した記述もあった。

- ・現実の世界のコミュニケーションが無くなる
- ・教師の慣れが心配
- ・視力低下や生徒の身体への影響が心配 (複数)
- ・パソコンの所持や使用経験などの生徒間に格差があるのではないかな
- ・生徒がノートを取る機会が減るのではないかな

5 考察と教育的示唆

本章では、前章で明らかになった研究結果に基づいて、履修生の過去の ICT 教育経験の内容を分析・検討すると共に、英語授業指導に今後 ICT を活用することに対する履修生の意識に焦点を当てながら考察を加えたい。

5.1 ICT 教育という言葉に対する認知度について

「ICT 教育」という言葉を聞いたことがある履修生は 51% で、数値的には高いとは言えない。しかし、家庭科の教職課程履修生を対象に 5 年前に行われたほぼ同様の調査結果（小清水他、2012）が 38.9% であったことを考えると、それほど低いとも判断できない。ICT 活用教育の加速化が求められている現在、この結果が示唆しているのは、単に言葉や概念の周知ではなく、履修生の ICT 教育指導力を向上させるためのより踏み込んだ取り組みを通して、彼らにその重要性を実質的に認識させることこそ重要であるということであろう。

5.2 履修生の ICT 教育経験について

5.2.1 中学・高校の英語授業における ICT 活用の経験

1) 使用した ICT 機器や活動内容

結果に示された履修生の中学・高校での ICT を活用した英語教育経験の内容を検討したい。数は少ないが、多様な ICT を経験した履修生がいる一方で、中高共に全く ICT 経験の無い者もあり、ICT 機器使用や活動について履修生間でばらつきがあり、また上位の限られた項目以外は、個々の項目の数値がかなり低いことが分かる（表 1、表 2 参照）。この点に関しては、回答者が在学していた時期も考慮して見ていく必要があると思われる。

本研究の回答者が中高それぞれに在学して時期は、中学であれば平成 20（2008）年度～平成 23（2011）年度かそれ以前、高校であれば平成 23（2011）年度～平成 26（2014）年度かそれ以前である。いずれの場合も旧学習指導要領下の教科書を用いた授業を経験したことになる。当時は現在に較べて情報教育に関する施設もそれほど充実していたとは言えない時期である。ICT の活用状況を示す実態調査によると、回答者が中学を卒業した翌年に当たる平成 24（2012）年度の中学での活用度は 45.2% であった。これは OECD 加盟国中第 10 位に甘んじたかなり低い数値であることが報告されている（ICT を活用した教育の推進に関する懇談会、2014）。また、情報機器や施設の充実度を表す指標にもなる教育用コンピューター 1 台当たりの児童生徒数（平成 25 年度）は 6.5 人、他の先進国は勿論、同じアジア地域の国々と較べてもシンガポール（平成 22 年度 2 人に 1 台）や、韓国（平成 23 年度 4.7 人に 1 台）で、数字で見ると、やはりかなり遅れをとっていることが指摘されている（同掲書）。

あらためて回答結果を見直してみよう。多くが経験した機器や教材例にデジタル教材やパソコンやプロジェクターが挙がっていたものの、タブレット端末（中高共に 0 名）や電子黒板（中学 0 名・高校 3 名）の使用経験者が極端に少

なく、機器を全く使用していないとする回答が高校で全体の 17% (7 名) だったこと、寧ろ「その他」の欄に CD デッキを記述した履修生が多かったこと等、どれも恵まれた ICT 活用状況を示しているとは言い難い。だが当時の状況を踏まえれば、これらの数字が示す履修生の限られた ICT 経験は、決して例外的なものではなく、一般的な ICT 環境をある程度反映していると言ってもよいだろう。そしてこれらの使用機器は、当然のことだが履修生が経験した英語授業での ICT を活用した活動と関係する。例えば、中高共に経験者が過半数を超え 1 位に挙がっていた「発音練習」は CD デッキで行うことが可能であるし、上位に挙がっていた「授業時の説明」や「DVD 視聴」、「ビジュアル・エイズ」は、いずれもパソコンやプロジェクターといった ICT 機器を授業に取り入れることができる典型的な ICT 活用例であろう。さらに英語という教科の授業指導特徴を活かす活動という観点から見ると、例えば IC レコーダーは、音読を録音させることが多い中学の方が多く、高校では、大学入試対策にもなるリスニング活動 (5 人に 1 人が選択) やメール、リサーチなどが加わっている。全体として経験者の数は多くはないが、学年の進行につれて英語を用いた学習内容や言語活動が高度化し、それに対応する ICT 活動を行っていることが結果から分かる。

しかし一方で、メールや会話など、英語授業指導で特に力を入れたい双方向性のある活動やリサーチを経験した者はかなり少ないことにも注意を向ける必要がある。つまり結果は、ICT の利点を活かした言語活動を経験した履修生は、中高の段階ではかなり限られている、ということを明らかにしたと言えよう。

2) 中学・高校の ICT 活用英語授業経験に対する履修生の受け止め

結果的には、数値が裏付ける通り、中学・高校での ICT 活用英語授業経験を多くの履修生はかなり低く受け止めている (中学が 2.04、高校が 2.21、平均 2.13)。しかも全体の約 4 分の 1 に相当する履修生は、ICT 活用の授業を中学・高校、どちらでも全く経験していない、と回答している。前章で報告した通り、任意の記述回答 (データ 2) には、経験の無さを心配する記述、あるいは大学での進んだ ICT 環境とそれを全く経験できなかった中高現場との落差を指摘して自分の ICT 活用力について不安を訴える内容が複数あった。彼らの現状と意識の有り様を理解する上で考慮すべき点であろう。

5.3 今後の ICT 使用に対する意識について

5.3.1 英語授業での 今後の ICT 使用に対する履修生の意識

中学・高校での ICT 活用教育経験への受け止めが全体的に低かったこととは対照的に、履修生の今後の英語授業指導への ICT 活用に対する意欲を示した数値は 5 件法で平均 4.14 を示し、かなり高い。過去の ICT 活用経験の有無に拘わらず、実に 9 割近い履修生が授業への ICT 活用に前向きな姿勢を示していることは注目に値するだろう。

スマートフォンやクラウドなど、現在誰にとっても ICT がより身近な存在になってきたことに加え、回答者が学ぶ大学で全員が同じ iPad を使用して ICT を

活用した授業が頻繁に行われている恵まれた ICT 環境にあることも背景として影響しているだろう。履修生の授業への ICT 活用に対する意欲や前向きな意識は、データ 1 とデータ 2 それぞれで示された他の結果からも分かる。例えばデータ 1 では、ICT 活用の利点や問題点をそれぞれどう捉えているか、数値には履修生がどのような意識や期待感をもっているかが示されていた。詳細は数量的データの分析結果に基づいて後述する。またデータ 2 では、その回答率の高さと記述内容に ICT 活用教育に対する履修生の意欲が表れていた。前章で述べた通り、データ 2 は任意回答であったが、にも拘わらず ICT 活用に向けて今後身に付けたいこと等に対する記述が回答者全体の 85%、心配や不安内容の記述が 78%と大変多かった。そして記述内容の大半は、明らかに ICT 活用教育を実際に行うことを前提とした内容で、履修生自身が ICT 活用を実践するために何が必要か、を考えて回答したことが読み取れた。

内容的に共通した意識が読み取れるデータ 1 とデータ 2、両方の結果に言及しながら、ICT 活用教育に対する履修生の意識がどのようなものであるか、結果について以下、2 つの観点から検討し、考察を加えたい。

5.3.2 ICT 活用授業の利点～今後身に付けたいこと

高い数値として結果に示された履修生の英語授業での ICT 活用に対する意欲の内実はどのようなものであるか、英語授業での ICT 活用の利点として彼らを選択した結果にまず表れている。回答にはばらつきが少なく、ICT 活用教育の利便性に対して履修生はかなり共通した意識をもっていることが分かる。授業の楽しさ (78%)、授業の分かりやすさ (68%)、学習者への動機づけ (51%) といった学び手の学習意欲に関わる項目が履修生の大きな (圧倒的な) 支持を集め、さらに授業の効率性 (68%)、という教える側の立場からみたメリットを 7 割近い回答者が選んでいた。この履修生の ICT 活用授業に対する視点はまた、任意の回答であるデータ 2 の記述内容分析の結果から浮かび上がった共通テーマに繋がる。多くの履修生は、身に付けたいこととして授業での ICT 活用の方法や指導法を、知りたいこととして ICT を活用した実際の授業例や機器や操作に関する情報を挙げた。生徒の動機づけにつながる、楽しいだけでなく分かり易い授業をどのように行えばいいのか、効果的な指導法を用いた実際の授業例を知ると同時により実践的な ICT 活用力を身に付けたい、という履修生の前向きな意識は、2 つのデータ結果からも明らかになったと言える。

さらにここで指摘したいのは、本結果に示された ICT 活用英語授業指導に対する履修生の意識が、学び手の「学習への興味・関心」を高める、あるいは「分かりやすい授業」の実現など、文部科学省が推進している効果的な ICT (情報通信技術) 活用の目的として掲げる内容とも合致している点である (文部科学省、2017)。履修生は、たとえ「ICT 教育」という言葉は知らなくても、教師としての視点に立つ ICT 活用教育の果たすべき役割についてある程度まで理解できていることを示すものであろう。

しかし同時に指摘すべき点は、「双方向授業が可能」を利点として選択した回答が全体の 1 割強と多くなかった (6 名=14%) ことである。中・高での限られた ICT 体験や従来型の教師主体の講義型形式の授業形態に加え、回答を 4 つ

以内に制限したことなど、理由は幾つか考えられるが、記述内容にも言及はなかった。だが、「情報の受信・送信」や「やりとり」こそ、教育の質の向上のために授業に活かすべき重要な ICT の特長の 1 つである（ICT を活用した教育の推進に関する懇談会、2014 年）。この点を踏まえれば、双方向性を有するどのような活動が英語授業で可能なのか、今後の英語科教育法の授業を通して体験的な指導をしていくことが求められていると言えるだろう。

5.3.3 ICT 活用授業の問題点～不安や課題

データ 1 の結果は、ICT 活用に対する問題点についても、履修生の受け止め方に共通する傾向があることを示した。全回答者の 9 割が、「機器や施設の学校差や地域差」を、次いで 7 割近い回答者が、教師の ICT 技術のレベルに左右される、を挙げていた。地域差について言えば、先述した教育用コンピューター 1 台あたりの児童生徒数を例に挙げれば、2016 年 3 月時点で、都道府県別では 8.2 人から 2.2 人の格差が、インターネット接続率についても 60.7%～99.4% まで、やはり大きな地域格差があったことが、2016 年度の文部科学省の白書（文部科学省、2017）で報告されている。主に履修生自身の経験に基づいた回答であろうが、明らかに学校現場の ICT 環境の厳しい現状を反映する問題点でもあることを、あらためて強調しておきたい。

データ 2 の結果から浮かび上がった問題点や心配に共通する主たるテーマは、履修生自身の ICT 技術の未熟さや ICT 機器操作やトラブルに伴う不安、中学・高校での ICT 活用英語授業の未経験を理由とする心配、教師側の準備への負担感であった。また ICT 活用授業に関する知識・情報の不足も複数挙げられていたが、これは先述した、履修生が身に付けたいことの内容とかなりの部分重なるもので、彼らがいかに ICT 活用のために必要な情報を求めているか、を示す証左であろう。

一方で、生徒の情報リテラシーや操作能力の格差、情報モラルなど既に社会問題化している内容も含まれているが、履修者は誰も言及していなかった。教科を越えた課題ではあるが、どのように指導する側としての意識化を進めるか、という点も含めて今後の重要な課題と言えよう。

ICT 活用への課題や不安に関する回答結果から、あらためてこの段階で指摘できることは、どの問題も短期間で簡単に解決できる内容ではないということである。だが同時に、ICT 環境や機器の地域差・学校差への対応を除けば、履修生に現場の実情を踏まえた必要かつ適切な知識や技能の習得と習熟の機会と時間を保障することで、一定の解決に近づくことができ得る内容でもある。換言すれば、今後の教職課程での履修生の学びはまさにこれに応えるべき内容を含むことが期待されている、ということを示唆するものであった。

6 おわりに

本研究では、教職課程履修生の中学・高校の英語授業での ICT 活用経験と今後の ICT 活用に対する履修生の意識を検討した。その結果、履修生の中学・高

校での ICT 活用経験がどのようなものであるか、その内実を示すことが出来た。また ICT 活用授業経験が無いことで履修生が技術や知識の不足に不安を感じることはあっても、経験の有無に拘わらず、履修生の英語授業指導への ICT 活用への意欲はかなり高いことが明らかになった。さらに本研究の結果から、多くの履修生は学習者の動機づけにつながる楽しく分かり易い授業を実現するための授業への効果的な ICT 活用を可能にする指導法に関する適切な知識・情報の提供や ICT 活用技能の指導を求めていることが分かった。

しかし、研究に参加した履修生の数は少なく、また対象となった2つのデータの情報量も限られている。結論から何か一般化出来ることを導き出すことは本研究の規模を越えているだろう。本研究から得た ICT 活用教育指導に関する多くの示唆を、まずは授業担当者である筆者のこれからの教職課程の授業に活かしていきたい。そして、次期学習指導要領を踏まえながら、教職課程の授業を通して学びの質の向上につながる ICT 活用授業指導力をもつ履修生をどのように育成していくか、その具体的な検討を今後の研究課題としたい。

参考文献

- 小清水貴子他(2012)「教員養成課程における ICT 機器を活用した模擬授業の実践と学生の意識の変容」『日本教育工学会論文誌』36, pp. 69-72.
- 文部科学省 (2017) 『平成 28 年度文部科学白書』文部科学省
- ICT を活用した教育の推進に関する懇談会 (2014) 『ICT を活用した教育の推進に関する報告書 (中間まとめ) 』文部科学省
- 杉本卓(2016)「教室から考える ICT とのつき合い方」『英語教育』9月号, p. 71
- 本多敏幸(2016)「ICT 機器を活用する授業作り」『英語教育』11月号, pp. 52-53.